

## 巻 頭 言

会長 佐藤隆夫\*

昔から本邦においては地学の研究の自由はなかったといっても過言ではない。地中を掘り返して化石を調べ、日本の土地の歴史を探求したり、先住民族の遺した土器や住居を調べ、先祖の起源に科学のメスを入れたりすることは、国体の尊厳を侵すものとされていた。それに加えて、わが長崎県は戦時中に要塞地帯であったために、特に地学の研究は遅れていたと思われる。

しかし戦後は、この二つの桎梏から解放されたことは、科学振興の目的から申しても、また学問研究の基本からいっても慶賀に堪えない所である。かかる欣ばしい時世にあつて、本県においても、地学の研究会が発足したことは大いに意義があると思う。

大抵の学問はそうであるが、特に地学においては、調査資料の集積や手仕事が多い。したがって緻密さと勤勉さを要する点において、極めて日本人向きの学問であると思う。ちょうど、織物工業において日本が世界に冠たると同様に、地学の研究においても日本は優秀なる成果をあげている。よく日本は金がないから研究は遅れているという社会通念が風靡している。なるほど本邦には人工衛星も飛ばし、宇宙旅行なんて話も聞かない。しかし、我々には我々でなければ出来ない会事がいくらかもあることを銘記すべきである。

さて、地学の研究は大いに国を愛することにつながると思う。近頃よくいわれる「人づくり」というのは、ちょうど、大工が材料を用いて自分の思うままの物を製作するのと似ている。しかし人の場合には意のままにはつくれないうらう。これに反して「人間形成」の方は自分が自由な意欲をもって自らを教育し、人格を形成していくことである。それと同様に、人が他から国を愛する心を養えといわれても、なかなか応ずるものではない。これに反して自らの意欲をもって郷土の地質を調査したり、天文、気象を観測して、自然に親しんでいるうちに、愛情が湧いて来、郷土愛が生じ、更には国を愛するようになると思う。

かかる意味においても、地学愛好者が益々ふえ、この地学会が大いに発展することを希う次第である。

\*長崎大学学芸学部地学教室